



彙報 : 平成25(2013)年度海港都市研究センターの活動

藤田, 裕嗣

(Citation)

海港都市研究, 9:191-194

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005505>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005505>



彙報

平成 25 (2013) 年度 海港都市研究センターの活動

2013 年度の神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター（以下、海港センターと略す）は、国際シンポジウムを共催してきた例年の事業を継続した。その一方で、2007 年度における大学院人文学研究科への改組で、共同研究組織として再編されて以来、担ってきた二つの授業科目については、研究科全体の方針に従って見直しを試みた。この試みについては、後述する。

(1) 人文学研究科共通科目の実施状況

①海港都市研究＜前期＞

冒頭にも指摘したように、人文学研究科としての改組以来、共同研究組織の一つとして前期課程用の共通科目「海港都市研究」を提供してきた。そして、昨年度は、『『海港都市』神戸の歴史と文化交流』をテーマに掲げて、現地の巡検に加え、解説を伴った神戸市立博物館における展示の熟覧をも新しく取り入れた。これに対して、今年度は、人文学研究科の共通科目としての意義を再検討するため、本授業を不開講とし、学生の受講動向を分析することにした。年度末の今、まさに検討を続けている。

②海港都市研究交流企画演習(海港都市研究交流演習)＜後期＞

例年同様、大学院生が専門分野の枠を越えて横断的に議論するなかで、自らの研究を学際的・国際的な視点から見つめ直し、同時に研究の意義を有効にアピールする能力を養うことを目的として開講した（タイトルの、「企画」が入った分は後期課程用の授業科目名で、カッコ内は前期課程用）。なお、本演習は 11 月に韓国・木浦大学校で開催された国際学術シンポジウム「東アジアの近代と海港都市——文明の入口から出口、そして混合の場へ——」（詳細は後述）の準備報告会も兼

ねた。演習では、事前に公募した報告予定者 5 名が、自身の研究発表を行った上で、教員や他の受講生との議論を通じて、学際的な場でも自らの研究の持ち味をより効果的に伝えることができるような心構えを身に付け、プレゼンテーションに関する技術を伸ばすことができた。最後に、国際学術シンポジウムにエントリーしていない受講者も自身の報告を行い、専攻を問わず集まった教員・受講者と相互に議論した。

なお、今年度は新しい試みとして、「古典力発展演習」の受講生にも発表を披露した。そして、国際シンポの参加者以外にも発表内容を披露できるよう、本番の直前に学内で広く開陳する機会を提供する試みは、昨年度に引き続き行った。具体的には、後の「海港都市研究会」の項目を参照されたい。

(2) 学際的かつ国際的な研究交流

①第 9 回海洋文化国際シンポジウム「東アジアの近代と海港都市——文明の入口から出口、そして混合の場へ——」

2013 年 11 月 8・9 日、韓国・木浦大学校において、国際学術シンポジウム「東アジアの近代と海港都市——文明の入口から出口、そして混合の場へ——」が開催された。これは、「海港都市」にまつわる諸問題を多角的に考察するため、アジア圏の研究者が国境や専門分野を超えて意見交換を行い、大学院生同士の研究交流を目的とするもので、今回で 9 回目となる国際学術シンポジウムである。今年度に会場を提供した主催校は、初回と同じく木浦大学校であり、本学からは、教員 2 名が参加し（うち 1 名が基調講演）、博士号取得者 1 名と大学院生 5 名が研究発表を行った。

第 1 セッション「新しい文明の入口としての海港都市」、第 2 セッション「新しい夢の出口としての海港都市」、第 3 セッション「異文化と伝統の混合空間と

しての海港都市」に分けた分科会方式が採用され、各セッションでは研究報告を受けた後、それらを踏まえた形で議論を戦わせた。翌日は、改装工事中の東本願寺木浦別院や新装なった木浦近代歴史館（旧東洋拓殖会社木浦支店の建物を改修）など、木浦旧市街地に残る日本に関する遺構の巡検に当てられた。参加者は、主催の木浦大学校と本学に加え、韓国海洋大学校、中国海洋大学と中山大学・烟台大学、長崎大学から集まった。台湾からの参加者がなかったのは、残念であった。

なお、今回の開催については、12月に中山大学で開催された国際シンポジウム（後述）の折に話し合われた結果、来年度は見合わせ、再来年度に台湾（台湾大学と中央研究院の共同開催）、と確認された。第3クルーに入り、10年目を迎える時点で、見直しが必要な時期に当たっていると言え、海港センターでもこれを機会として、再検討が必要であろう。

②海港都市研究会

本研究科の博士号取得者や内外の研究者が研究内容を報告して教員や大学院生らと意見交換を行う場として「海港都市研究会」を一昨年度より設けたが、今年度も引き続き、開催に努めた。今年度の開催実績は以下の通りである。

第1回海港都市研究会

日時：2013年4月8日（月）17：10-18：45

場所：A132 学生ホール

発表者と発表題目：宮内 肇「変化の中における不変——1920年代中国郷村社会の一側面——」

開催主旨：宮内氏は、本研究科で研鑽を積み、2007年、2010年国際シンポでの報告も踏まえ、博士号を取得された。4月26日に韓国海洋大学校主催で開催される国際シンポジウムにおける発表内容について、予行演習の意味も込めて、披露をお願いした。

発表要旨：近代中国における郷村社会の特質を解明するため、1920年代初頭の広東で陳炯明によって実施された地方自治政策を取り上げ、それに対する郷村社会の反応を考察するものである。広東では明清期を通

じて、宗族を基盤とした郷村構造が形成され、清末期の地方自治政策においても、宗族を単位とする自治団体の設立が見られた。ゆえに陳炯明もこれを考慮し、宗族による伝統的な自治を郷村自治の政策に取り込もうと計画した。一方、郷村においては、新文化運動の影響を受けた若年者が、郷村自治を実施する上で伝統的な宗族形態の改革を主張したため、伝統的宗族の中で社会的地位を守ろうとする老成者との対立が生じた。しかし、陳炯明の政策も若年者が主張した郷村自治案も、宗族それ自体を否定したのではなく、あくまで宗族の維持を前提とし、その中で宗族の改革を主張するにとどまるものであった。

第2回海港都市研究会

日時：2013年7月25日（水）16：45-19：00

場所：C262 プレゼンテーションルーム

統一テーマ：「中国大陆との兩岸関係からみた台湾——マイノリティー社会の視点から——」

発表者と発表題目（仮題）：

黄嘉琪（国立金門大）「中国大陆に近い台湾・金門島について」

田中剛（人文学研究科研究員）「台湾在住のモンゴル人からみた中国大陆との関係」

開催主旨：中国・福建省アモイの目と鼻の先にありながら、台湾政府（中華民国）が支配する金門島では、1958年に中国共産党軍と中華民国軍との間で戦闘が起き、関連する史跡が残されている。田中氏がこれまで聞き取りした台湾在住のモンゴル人のなかにも、この戦闘の参加者もいた。また、金門島が台湾政府支配下に残ったのも、共産党軍と戦う中華民国軍に日本軍人の根本中將が協力したから、とも言われている。根本は、日中戦争中はモンゴル占領軍の司令官であった。

現在の金門島は、対岸のアモイとのあいだで人の往来が激しく、中国大陆と台湾の兩岸関係を知るには格好の場所である。田中氏が調査している台湾のモンゴル人も、兩岸関係の産物だとも言える。その状況の中で、黄氏が追究されてきた、台湾ご出身で滞日者の現況についても、説明が試みられた。

当日は、プレゼンテーションルームがほぼ一杯になる程度の参加者があり、終了後、会場を変えての議論も遅くまで熱心に続けられ、有意義な会になった。

第3回海港都市研究会

日時：2013年10月30日（水）13：20-16：45

場所：A112 学生ホール

開催趣旨：海港都市国際シンポの予行演習も兼ねて、披露する機会を提供する。

発表者と発表題目：

王 飛（人文学研究科博士課程後期課程・芸術学）
「上海空間と身体：脱／再構築された『国民国家の叙述』の可能性」

寶 新光（前期課程・韓国文学）
「近代中国と韓国における明治小説の受容様相について——徳富蘆花「不如帰」を中心に——」

大川内 晋（後期課程・社会学）
「トロントにみるクリエイティブ・クラスの理論の現実と構造的問題（仮）」

三角 菜緒（後期課程・日本史学）
「日本近世における海港都市と河川舟運——兵庫県高砂港と加古川舟運を事例に——」

根本 峻瑠（後期課程・西洋史学）
「ハプスブルクの海港都市—トリエステにおける言語とネーション」

(3) 国内外の大学との連携

以下の2大学が主催された国際シンポジウムに対する発表者等の派遣依頼に応えた。

①長崎大学主催による国際シンポジウム

日時：2013年12月14日（土）-15日（日）

テーマ：東アジアにおけるヒト・モノ・情報・資本の多元的流通——グローバルな社会・文化動態研究に向けた学際的試み——

場所：長崎大学文教キャンパス総合研究棟

長崎大学環境科学部葉柳和則教授と本センター副

センター長藤田裕嗣教授は、一昨年度の台湾での国際シンポ以来、意見交換する機会を何度か持ち、長崎大学内の研究プロジェクト「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー」と海港センターとによる連携体制の模索を今年度も続けた。具体的には12月に長崎大学で開催されたシンポジウムに、海港センターから神戸大学関係者の発表を紹介する形で協力した。具体的には、先述した第2回海港都市研究会での発表者2名である。

なお、長崎大学の増田研准教授（文化人類学）が神戸市内の他大学で出講されている機会を捉え、12月25日の夕方に来学いただき、ご研究内容の披露をお願いした。クリスマス当日でもあり、参加者は少人数に限られたため、海港都市研究会とは銘打たなかったが、有意義な機会になったと考えている。

②中山大学主催による国際シンポジウム

日時：2013年12月20日（金）-22日（日）

場所：従化翠島温泉酒店（中華人民共和国広東省従化市）

「近代以来のアジア移民と海洋社会」をテーマとした国際シンポについて、中山大学から神戸大学に派遣依頼があり、教員では、濱田麻矢准教授がセッションの司会として活躍された以外に、研究発表を兒玉州平助教＜英語＞をお願いした。さらに、川口ひとみ氏（学術推進研究員）＜中国語＞も発表された。各々＜＞内に記したように、母語以外の言語による報告で、国際的で貴重なプレゼンの機会を提供できたと言える。他に、中国語の通訳の派遣依頼もあり、留学生の連 興楨氏（社会学 D2）にお願いして、重責を見事に果たされたとの報告を濱田准教授から受けている。なお、最終日の22日は、従化市周辺の巡検であった。

(4) 研究成果の発信

①紀要『海港都市研究』の刊行

2014年3月、海港都市研究センター紀要『海港都

市研究』第9号を刊行した。すなわち、本号である。第9回海洋文化国際シンポジウム「東アジアの近代と海港都市——文明の入口から出口、そして混合の場へ——」における藤田の基調講演、本学院生による報告の要旨に加えて、シンポ参加者である竇氏と根本氏、三角氏の論文を収録している。さらに、金氏と劉氏、崔氏と兒玉氏からの投稿論文なども載せられている。

②海港都市関係資料の調査

今年度も継続して附属図書館との共同作業を進めた。

(文責：藤田裕嗣)